

# 生涯要の<sup>かなめ</sup>人

(二代目) 鈴木岩治郎さんの思出

柳田 義一

鈴木岩治郎さんに就いては僕達の物心づく頃から享けた恩恵は泉の如く云い尽くせないものがある。

生涯徳望の方であつただけに、特に目立つた逸話らしいものは格別覚えがないが、御逝去の後、偶々側近におつた友人から語られた一事は岩治郎さんの御性格を知るに最も相応しいものと思われる。夫れは今から三十年程前に遡つた一夕、市内の知名人多数と、兵庫西常盤に宴を張られたことがある。

その中に岩治郎さんも羽織袴の和服姿で座を占められていたのであるが、その隣席に侍べられた、同じ年格好の紳士、今迄知らぬ同志でもあ

り初めは切掛けがなかつたものか、あたりさわらずの、四方八方の話題も、宴が愈々酣となつて和氣藹々、何時の間にか御兩人膝を交えて酌み

かわされて、大いにメートルをあげられた訳だが、彼の紳士は日頃の酒癖というか、良くある泣き上戸で、意気のあつた岩治郎さんの羽織袴に遠慮会釈もあらばこそ、頭をすりつけられ、鼻水や涙をすりつけると云う大虎振り、岩治郎さんは寛容にも彼の為す儘、払い除けられもせず、むしろその雅氣を愛せられたか、うまが合つたと云うのか、逆に介抱までしてその夜の宴が果てたと云う。夫れからの数日後、この泣き虎氏

村野山人編集兼発行人となり、山県、大山、東郷大将以下、各界知名士の署名を集めて、乃木大将の忠誠を讃えた『報告真髓』大正三年刊に、鈴木商店主として収録されている岩治郎さんの筆跡

鈴木岩治郎

岩治郎さんの筆跡

は鈴木さんなることを誰かに教えられて自責に絶えずとあつて、前夜の無礼を謝すべく、威儀を正して鈴木邸の門を叩かれた。無論岩治郎さんの方としても、謝すも謝さぬもないと、大いに喜ばれ之を奇縁として、終生交友を続けられて来た。この仁は、誰あろう現阪東調帯社長榎並正一さんの殿父充造氏(当時神戸商工会議所会頭)その人であつた。昭和十三年五月大阪朝日新聞連載「神戸人覚書欄」に語る人として、この榎並さんが左の文を寄せられている。

「高所からならむ眼」と題して、鈴木岩治郎さんは、高い所から物を見るといふが、そういった人物は中々見つかるものではない。その意味からいって、鈴木さんは神戸財界の一見識といつてよからう。大鈴木商店華やかな頃、よそ目で見ると、金子氏が一人で切り廻しているかに、見えたものだ。いつも恐ろしゅう応揚に構えていて、その実チャンと大局を見抜いていて、人の意表に出るところ等、堂にいったものだった。多趣味であられただけに所謂、通人で岩治郎さんの穩れ

た足跡は大きいものがある。例えば芸術家達の後援には、橋本関雪画伯や、萬谷竜岬画伯、林武氏等があり中国の名優梅蘭芳を、大正八年五月日本に招聘、聚楽館の舞台を踏ませられたのも岩治郎さんの企劃、この頃から中国との演芸交友関係を夢見ておられたかも知れぬ。折りに触れ今尚耳朶にのこる、僕達に対する、熱情の御叱声は、忘れ得ざる心の糧となつてゐる。

四〇、二、一一

のびのびと、しかも優雅な線をもつた梅蘭芳の筆蹟(三十七年来日の時)

月落烏啼霜滿天  
江楓漁火對客船  
愁眠姑蘇城外  
寒山寺夜半鐘聲  
到客船

一九三七年夏 梅蘭芳